

<b>Title</b>	世界におけるキリスト教学校の意義
<b>Author(s)</b>	古屋, 安雄
<b>Citation</b>	キリスト教と諸学 : 論集, Volume12 : 25-50
<b>URL</b>	<a href="http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=2813">http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=2813</a>
<b>Rights</b>	

聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

## 世界におけるキリスト教学校の意義

古屋 安雄

近藤先生、大変良いご紹介をありがとうございました。今のご紹介の中にもありましたけれども、私が前回この研修会に来ましたのは、今からちょうど二年前の一九八五年。これを見ますと、一月一六日、場所は二号館音楽室でした。短大ですね。今のお話にあったように、これから大学をつくるというときに参考になるような話をしろというので、励ましのつもりで来たんです。あの時はおそらく五〇人いなかったでしょうね。まだ小さな短大でした。これから大学をつくろうということをお大木先生から聞いていたわけですが、果たして大学が今からできるのか。しかも冬の時代だと言われているのに、あえて「流れに抗して」とプロテストはよく言うんだけど、そういうことをやってできるのかと、心配しながら、しかし「やる」と言うのだから、励ましのつもりで話をしたわけです。それから二年経って、これだけ人がいっぱいいるのです。よく経営が成り立つと感心はしているんですが、いろいろな苦勞がいっぱいおありでしょう。これだけ人数が多くなると、いろんな問題が出てきます。これが、まさに現代の大学の問題なんですけれども、私がここで二年経って、こういう話をすることによって、これからさらに二年後、そのと

き私は生きてないかもしれないけれど、「あのとき古屋先生に励まされて、こんな立派な大学になった」と言われれば、「やっぱりあのときの研修会は良かった」と言うことになるんじゃないかと思えます。

先程、大木先生の新年の所信を聞きましたが、私との関係を大木先生は承知の上でああいう話をされたんだと思いますが、非常に時間的な話をするんですね。それに対して、私はいつも空間的な話をする。ですからあえて時間的な話をしたんだろうと思っていました。千年先の話をしたって、それはそれでいいですが、やはり一番大事なのは、今ここでどうするかということ。そのことを考えなくてはいけない。それで、私は空間的というか、現に今ここの問題を取り上げようというわけです。ですから相補うでしょう。両方聞きながら、皆さん自分で考えて下さい。私の言ったことに対していろいろご批判なり、ご質問がありましたら、あとでお受けしたいと思います。

一二年前に、短大だけだったんですが、私は「日本におけるキリスト教学校の意義」ということについてお話をしました。そのときに、私はICUに二五年間いたので、その二五年間の経験に基づいてお話をしたわけです。それから一二年経ち、この三月末に三七年いたICUを辞めるわけですが、今回、話をしてほしいと濱田先生からお願いがあったときに、「私は昔、何という題で話したか」と聞いたら、「日本におけるキリスト教学校の意義」と言われた。

じゃ今度は「世界における」と大きく出たわけです。「世界におけるキリスト教学校の意義」と。だから、そういう意味では非常に大きな題を掲げたんですが、しかし実はこれは大風呂敷を広げたというのではないんです。この一二年間の間に私自身がいろいろ経験したことがあります。あのときに語った「日本におけるキリスト教学校の意義」というものが、ただ単に日本だけでなく、現代はまさに世界において意義を持っているんだということを私は痛感させられました。これから申し上げる、私のいろいろな経験を通してそのことを感じたわけです。だから、あのとき述べたキリスト教学校の意義というものが、現代日本だけではなくて、現代世界においてそれがあるんだということを、最

近ますます痛感していますので、そういったことからお話をしていきたいと思っっているわけです。

一二年前に私の話を聞かれた方が何人かいらっしやるでしょう。覚えていらっしやるかどうか知りませんが、聖学院で出している本、『キリスト教と諸学』の第一号に出ていますから、それをもう一度読んで頂ければいいと思います。あそこで私は一二年前に、日本におけるキリスト教学校、特にキリスト教大学の教育の三つの特徴というのを述べておきました。

一つは人格教育 Personal Education。いわゆる人格教育というのは、Person to Person、すなわち、先生と学生の関係は、パーソナルな人格的な関係である。そういう教育をするのが、キリスト教大学の特徴ではないかと言ったわけです。今日の言葉で言いますと、Quality Educationと言いますか、単に量的ではなくて、質的な教育と言っても良いかもれません。

二番目に申し上げたのは、国際教育 International Education ということをしました。今日では、むしろ Global Education という言い方をしましょう。これは、やはりキリスト教が単に西欧の宗教ではなくて、まさに今日世界的な宗教であるということを示しているように、あるいは大木先生の先程の話にあったように、全人類の歴史を通して働きかけている神の働きの一つとして現れているのですから、当然グローバルになるわけです。ですから、単にナショナルスティックあるいは一つの民族的な教育にとどまらない。これは、キリスト教学校教育の大きな特徴だとあつたとき申し上げたのです。

第三番目に、もちろんキリスト教大学の特徴は、Religious Education と言うか宗教教育、あるいは Christian Education と言われているものです。これは、単に人間と人間との関係、倫理とか国際とかそういうことだけでなく、いわば垂直線的な関係、われわれと超越者との関係、神との関係、永遠者との関係、そういう次元も教える。こう

いったことが、キリスト教学校の特徴だと申し上げました。逆に言うると他の学校では、こういう教育はなかなかできないんです。あとで申し上げますが、今や、教育ということは、それこそ一つのインダストリー、Education Industry になっている。工場みたいになっているわけですね。そこで人格教育ということは、やりにくくなってきている。そのときにキリスト教大学の意義があるとすれば、やはりその中であって人格教育 Person to Person の教育を続けることだと思っておりますし、今まさに国際化しているように見えながら、実はご承知のように冷戦のあとに、民族的なあるいは宗教的ないろんな紛争がある中で、本当の意味でのインターナショナル、あるいはグローバルな教育というのが必要になってきている。それから、最近のオウム真理教の問題をはじめとして、宗教ということがこれだけ問題になってきているときに、キリスト教学校ですつとやってきたキリスト教教育、宗教教育が非常に重要になってきていると思っております。

すなわち、一二年前に申し上げたこの三つの点、これが今日の教育界において必要とされているということが、この一二年の間に、それこそ世界的規模において明らかになってきたんじゃないかと私は思っているわけです。そのことをまず、アジア、それから旧共産主義国とアメリカの例を詳しく申し上げながら進めていきたいと思えます。

第一に、われわれはアジアの一員ですけれども、アジア諸国に目を向けるときに、私がこのことに関心を持ったのは、一九八六年から九一年までの六年間、ニューヨークにある United Board for the Christian Higher Education in Asia、普通、ユナイテッドボードと言いますが、そういう財団の理事を務めていまして、その関係でアジア各国の大学、キリスト教大学はもちろんのこと、国立、私立大学を訪ねました。そういう経験に基づいてこれから申し上げるわけですが、実は戦前、一九二〇年代には中国に二三のキリスト教大学があって、それぞれの教派が建てたんです。日本もそうですけれども、メソジストだとカプレスビテリアンとか、そういういろんな教派が自分の大学を建てたん

です。それが今でも中国に残っておりませんが、有名なイエレンチン大学、シャンハイ大学等です。これらの大学は今も国立になってしまいましたが、元々はキリスト教大学だったんです。各教派がそれぞれ創立して、そのためにお金を集めてきたんですが、能率が悪いと言うことで、それを一つにしたのがユナイテッドボードなのです。ですから、これは中国キリスト教高等教育合同理事会として、一九二〇年代に合同してつくったものです。これがプロテスタントの主流教派、メソジストだとかプレスビテリアン、そういう人たちが集まって合同して募金をし、中国のキリスト教を援助してきたわけです。ところが、第二次世界大戦後に中国が共産化し、一九四九年に宣教師たちが追放されましたから、それでこれらのキリスト教大学は国のものになったんです。そこで一九五一年に、この理事会はインチャイナだったのが、イン エイシアになったんです。中国ではできませんから、中国以外のアジア諸国のキリスト教大学を援助しようという仕事に変わっていったんです。それが今もあるユナイテッドボードなんです。

ついでに言いますけど、私はこういうことをアメリカの教会がやってきたというので感心したんですね。長い経験にかんがみて、ああいうオーガナイゼーション、一つの組織をつくって助けてきたんでしようが、それに比べて日本の教会というのは、一体アジアのどこに大学をつくりましたか。何もないんです。金儲けだけしているんです。ですから、みんなから尊敬されないんです。アメリカやヨーロッパの人は、随分悪いことをしましたけど良いものを残している。それが違うんです。だから、我々も今まで受けてばかりいたけれども、これだけのものになったのだから、何か向こうで一緒になって、なぜ一つの大学ができないんでしょうね。そういうことを非常に教えられました。

このユナイテッドボードは、年に二回は理事が集まります。私はアジア理事というかたちで出ましたが、そこに各教派の代表がいるんです。メソジスト教会、長老教会、ルーテル教会などいろんな教会の代表で、教育のことに關心を持っている人がいるわけです。それ以外に、アメリカの学界の代表がいるんです。私がいたときには、ハーバード

大学の学長だったピューシーとかプリンストンの学長だったゴーヒンとか、ニューヨーク大学とあとで国連大学の初代の総長になったヘスターとか、そういう錚々たる人々がいました。それに外交官がいます。外交官でかつてアジア各地とかいろんなところで大使になったような人たちもです。それから、もちろんライシャワーみたいなアジアの専門家の学者がちゃんといるんです。やはりお金がいりますから、財界の代表もいる。私はそこで初めてメアリー・ロックフェラー夫人に会いましたが、八〇何歳のしわくちやのおばあさんで、その方も一緒でした。あのときちょうど日本がバブルの最盛期で、ロックフェラーセンターを買ったときなんです。そのときミセス・ロックフェラーは私に言うんです。「日本人はうちのセンターまで買っちゃった。それだけお金があるんだったら、なぜアジアの大学のためにお金を出してくれないの」と。向こうから見れば不思議でしょうね。あれだけお金を儲けているのに。ニューヨークのロックフェラーセンターまで買うんだから、そんなお金があるんだったら、アジアでそれこそ日本は悪いことをしたんだから、償いのためだつて学校をつくつてもいいんじゃないかと思うのではないでしょうか。そのロックフェラー家の人だとか、それから、タイムマガジンとかライフマガジンを作ったヘンリー・ルースは元々中国の宣教師ですが、そのヘンリー・ルース財団の三代目とか、そういう人たちが年に何回か集まって、遠いアジアのキリスト教大学のためのことを、いろいろ議論しているんです。政治情勢、国際情勢というのを分析しながら、どこの国のどういう大学を援助したらいいんだろうかと議論している。ああいうのを見ると、日本はまだまだ、他者性とか、それに対する感覚がない。自分のことしか考えていない。だから、この人たちが、そういうアジアのいろんなことについて、本当に考え、そのために苦労しているということを目の当たりにしている教えられました。

そこに関係した経験から思ったのですけれども、アジアの財団になってから、これはたまたま戦後でしたから、例えば日本の場合、ICUは、ここから随分援助を受けたんです。香港が七月に中国に戻りますが、三〇年間にわたっ

て香港の学生を毎年四人ICUに留学させるそのお金はユナイテッドボードから出たんです。同じところに台湾の台中の東海大学、韓国の延世大学、フィリピンのシリマン大学、インドネシアのサチャワカナ大学、タイのピヤップ大学、そういう新しい大学を創立するのを援助したんです。それから、インドにも古いキリスト教大学が少なからずありますが、財政的には非常に苦しいところにあるので、そういうのも助けてきました。

ところが、一九八〇年に中国の文化革命のあとになって中国政府の態度が変わってくるわけです。彼らも教育ということを自由に、世界に追いつくような教育をしたいと考えた結果、ユナイテッドボードに接近してきたのです。かつてユナイテッドボードが援助していた大学の資産を全部中国が凍結して取ってしまったわけですけれども、それを返す代わりにそこから出てくる利子を使って私たちの教授や学生を教育してくれ、ということをやユナイテッドボードに頼んできたのです。それで、ユナイテッドボードは元々中国のためにできたものだから、もちろん喜んでやろうということになりました。相当大きなお金が入ってきたんですが、それを全部中国のために使うということ、文化革命のために大変な苦勞をした中国の教授たち、年をとった教授たちをアメリカで再教育したり、若い学生たちを留学させたりしてきたわけです。したがって共産国である中国が、ユナイテッドボードに接近してきた。しかもアメリカに留学して自由になり、初めてキリスト教に関心を持ち、クリスチャンになるような人が出てきた。そういう人々を見ると、もちろん中国の国立大学がすぐにキリスト教学校になるところは考えられませんが、しかしその中でもだんだん自由にして、キリスト教的な教育というものを熱心に学ぼうとしている人々がいることをまざまざと見ることができました。

もちろん、これには中国側の実利的な意図と言うか考慮があるわけで、そのことによって自分たちの教授や学生たちを教育してもらいたいというところがあるんでしょう。しかし、それだけじゃなくて、やはり今までの中国になかった



たものをキリスト教大学、あるいはキリスト教関係の教育機関から学ぼうということに、みんな気が付いてきているんじゃないかと思うんです。さらに、最近ではベトナムのような国がユナイテッドボードに援助を申し込んできた。もちろん財政的にも大変ということがあるんですけど、そればかりじゃなくて、この場合もやはり本当の自由な教育をするためにはキリスト教関係の大学、あるいは教育機関に接近したいということが見えるわけです。彼らが言う開放政策とも一致して、アジアにおける共産国までも、キリスト教の教育というものにアプローチしているのを見ると、やはりキリスト教大学というのは、今日、後で言いますが、アジアにとって非常に必要なものになってきていると思うわけです。

二番目は、ヨーロッパの旧共産主義国のことです。最近の一番大きな問題はもちろん一九八九年のベルリンの壁の崩壊、それに続くソ連の崩壊による旧共産主義国の学校教育、大学教育にそれこそ革命が起こったわけです。共産主義における教育、あるいは大学というものがいかに不自由なものであったか、あるいは厳しい統制下にあったかということが最近明らかになってきました。実は同じようなことがナチスのときに起こったことであるし、日本でも軍国主義の下で経験したことなんですけれども、それでもある知識人たちは幻想を持ってしまった。ナチスや軍国主義はそうだったけども、共産主義はそうではないんじゃないかと。日本の文化人やクリスチャンの人でもそういう幻想を持っていた人がいましたが、それが全くの幻想だったということが、この崩壊によって明らかになったわけです。

いわゆるスタージと言いますが、東ドイツでも国家警察というのがあって、大学の中に入っているわけです。つい最近まで、こういうところで自由に話をできるというのは日本とアメリカくらいしかありませんでした。東南アジア、韓国、台湾に行っても大変です。私が自由勝手なことを言うので、聞いている方はヒヤヒヤしながら聞いてい

るんです。それで私は「こういうときクリスチャンは恐れなくてしゃべるべきだ」と言ったら、「先生は日本に帰るからいいけど、私たちは残っているんですから」というわけです。全くその通りです。お互いスパイをしているんですから、私みたいなのが行くと、私と誰が握手をしたか、それをちゃんと政府に伝えるんです。しかし、これは日本で戦時中に、五〇年前にあったんです。日本の長い歴史をみたら、この五〇年間の方が例外的で、これが当然だと思わないで下さい。いつ変わるかわかりません。だから、大木先生は一所懸命憲法を守れ守れと言っているんです。あれがなくなったら、すぐ戻りますから。韓国も台湾も中国もみんなそうです。やっとこのごろになって自由になったんです。いずれにしてもソ連をはじめとして、東ヨーロッパの共産主義の衛星国はみんなそうだったんです。大学の教授がお互いにスパイをするのです。その場合に誰が教授になるかということとは学問的な業績ではなく、どちらの方が共産党に対して忠実であるかどうかによってなるので、学問的に全然資格がなくても教授になるのです。

そこで、彼らがいかに本当の意味での自由な大学、国からも自由である、イデオロギーからも自由である、そうあるべき大学の姿というものを求めているかが痛いほど分かります。それで、共産主義の崩壊によって、ロシアをはじめとして東ヨーロッパのいろいろなところで、新しい大学運動が始まっています。少なからぬ人々がキリスト教学校、キリスト教大学をつくりたいと願っています。これはカトリックでもそうで、上智大学にいたネメシユギ教授が祖国のハンガリーに帰ったのは、ハンガリーで本当に自由な神学校をつくらなければいけないということで帰られたのです。同じハンガリーでもあそこは改革派教会が非常に強いところですから、あそこでもまず最初に改革派教会のクリスチャン・ジュニア・カレッジ、短期大学をつくりたいというので、今募金活動をしています。そのようにハンガリーとかルーマニア等、いろいろなところでキリスト教大学をつくらうという運動がある。キリスト教大学をつくる運動ができることは自由だという証拠なんです。できないということは、自由がないということなんです。だから

キリスト教大学があるという事は、その国が自由であるかどうかのバロメーターの意味があるんです。今までは、そういうところでキリスト教大学をつくらうとしても、できなかったんです。二年前の一九九五年、私はアメリカのペンシルバニアで開かれたメソジスト系の大学の学長会議というのに招かれて行きましたが、そのときにウクライナから二人の学長が来ていました。一人はウクライナの国立大学の総長、もう一人がウクライナの工業大学の総長、それからもう一人は国立大学の女性の教授と、三人がメソジストの学長会議に参加して、アメリカのキリスト教大学のことについて学びたい、あるいはディスカッションしたいというのでやってきたわけです。そのうちの一人の女性の教授、この方はなかなか頭の良さそうな人でしたが、この人がこういうことを言うんです。「私はこの間まで無神論の教授だった。ところが急に今度は有神論の教授になれと言われて、どう教えていいか分からない。そういうことを勉強できるのはどこだろう」と。アメリカの州立大学ではあんまりできない、やはりキリスト教大学に行った方が良いだろうということでメソジスト大学で勉強することになった。面白いでしょ。今、そういう時代なんです。かつての無神論が時代遅れになって、これからもう一度キリスト教とか有神論を研究しようではないかと、そういう時代なんです。これは普通の国立大学ではなかなかできません。キリスト教大学ならできるんです。その人が留学したいというのでメソジスト大学が受け入れたんです。再教育をするわけです。そういうことが、かつての共産主義諸国で行われている。

以上アジアとかあるいはかつての共産主義諸国で、キリスト教大学をもう一度見直す、あるいはその大学をつくりたいという気運が盛り上がってきているということを見ました。次はアメリカですがこれが問題なんです。アメリカの大学は、実は聖学院をはじめとしてICUもそうですけども、多くの日本のキリスト教大学にとってのモデルでした。戦前はベルリン大学のようないくつかのドイツの大学をモデルにしましたが、戦後の日本の新制大学というのは、まさ

にアメリカの大学がモデルだったので、良くも悪くもわれわれの問題というのは、実はアメリカの大学の問題なんです。ところが、特にアメリカの大学の中でもかつてキリスト教大学と言われていたものが、どんどん変化しつつある。その変化を見ていると、実にアイロニーを感じざるを得ません。かつてキリスト教大学として始まったはずの、アメリカの大学がどんどん世俗化して、他の世俗化した国の方が今一所懸命キリスト教大学をつくらうとしているからです。これを見ていると、イエスの山上の説教の中に「先なるものはあとに、あとなるものは先に」という言葉がありますが、全くその通りだと思わされます。かつてキリスト教大学で先端を行っていたアメリカの大学の方がどんどん世俗化していき、あとを追っかけていった後進国の方が一所懸命キリスト教大学をつくらうとしている。そういうアイロニーの状況を、私たち日本にいる者は、特に日本の中でもキリスト教大学に奉職をしている私たちはよく知っておくべきじゃないかと思えます。したがってこのことを詳しくお話しいたします。

この一二年の間にアメリカの大学に大きな変化が起こりました。私がここでお話をした一九八五年から一二年経っているんですけれども、一九八七年に大学問題で異例なことにベストセラーになったアラン・ブルームの『The Closing of the American Mind』という本が出ました。アラン・ブルームは、かつてコーネル大学にいた人で、のちにシカゴ大学で社会思想史を教えていた人です。この書名を、日本語では、『アメリカンマインドの終焉』というふうに訳しました。しかし、これはオープンに対するクロージングだから、むしろ閉鎖とか閉塞とか言った方がいいでしょう。非常に開かれたはずのアメリカンマインドが逆に閉鎖的になったということの問題にしているのです。これは、大変コントロールバーシカルな本になって、ベストセラーになったんです。いろいろな見方があります。一言で言いますと、アラン・ブルームという人は六〇、七〇年代のアメリカの大学紛争は全く不毛であり、全くアメリカの教育にとっていいものがなかったと非常に否定的な見方をしています。私はもう少しポジティブに見るところが

あるんです。なぜなら、このおかげでアメリカでは、いわゆるアイビーリーグのプリンストン大学もそうですけど、男だけの大学だったのが初めて男女共学になったのです。それから、それまで黒人はほとんどいなかったけれども、黒人も入るようになった。それから、先生方の中にも女性が入るし、黒人や有色人種も入るようになった。だから、そういう側面もあるので私はアラン・ブルームほど六〇、七〇年代の大学紛争に対して否定的ではないのです。しかし彼がそのことを認めたとしても、やはり今のアメリカの大学には問題があると指摘しているのは正しい。そのことのゆえにこの書物がこれだけ問題になったと思うんです。そのことは、この副題によく示されています。『How Higher Education has failed democracy and impoverished the souls of today's students』いかにアメリカの高等教育、大学教育が民主主義に失敗したか。そして、現代の学生たちの魂を貧困にしてしまったか。これは日本語に訳されていますから、みなさんお読みになった方もあると思いますが、私はこれはほんとに熟読した方がいいと思うんです。日本の問題と共通の問題を論じているからです。

一見アメリカの大学は非常にオープンになっていて、開かれた大学のように見えるが、実はそうではないんだという。この間もカリフォルニアでそういう調査があったけれども、今まで文化と言ったときに、プラトンから始まってずっと現在まで西欧を中心に教えてきた。政治学でもそうです。それに対して、それだけでは駄目で、やはり今の世界はグローバルな時代だから、もっと中国の思想だとかインドの思想とかそういうものを教えた方がいいのではないかと、というように、一見開かれているんです。例えば語学にしても、第二外国語でスペイン語だとかドイツ語だとかフランス語を勉強しろと言ったが、今そんなものは西欧主義だ、日本語や中国語をもっと勉強したらいいのではないかと言う。しかし絶対とらなくてはいけないとはいわない。全部相対化されているのだから、日本語も結構、韓国語も結構、ベトナム語も結構というのです。だから学生はいろいろの言語を少しずつつかじっているけれど、マスターした外

国語はないという。その結果、非常に開かれていようでありながら、逆に非常に狭くなっている。そういうアイロニーというか矛盾を取り上げているんですが、いずれにしてもこれは非常に大きな問題提起をしているわけです。

それをうけて矢継ぎばやに、今度は特にキリスト教関係の大学関係者たちが、今日の大学教育の問題を取り上げる論文や本を随分出しました。一九九一年に、これは私の『大学の神学』という本の中に書いてありますけれども、ノートルダムの教授だったカトリックのバーチャルという人が、「キリスト教大学の衰退と崩壊」という論文を書きました。具体的にはこの人はヴァンダービルトというメソジスト系の大学の例を挙げているのですが、そこで起こったことと全く同じことが五〇年後だけでも、今カトリックの大学で起こっている。アメリカというのはもちろんプロテスタントの国でしたから、大学でも一番古いのはプロテスタントです。一九世紀になってカトリックの移民が増えてきてから、カトリックが教育に参加してくるわけです。それでノートルダムなどの大学が出てきますが、そこでも全く同じような問題が出てくる。初めキリスト教的理念を持って始まった大学がだんだん世俗化して行く。そのことをバーチャルは全米的に広がっている現象だと言うのです。それをうけて翌年の一九九二年に今度はその当時デューク大学にいた人ですが、マーズデンとロングフィールドという二人の教会史の専門家が編集して二〇人くらいの人たちにいろいろ書いてもらって、『The Secularization of the Academy』という本を書いた。これは、アメリカの学園というか大学に世俗化が起こってきているが、これは非常に奇妙な現象だと言うんですね。かつては教会が、あるいはキリスト者たちが大学を創立した。

ところが今やそういう教会とか宗教は大学のすみにはいかにない。むしろ大学の中で盛んなのはスポーツなのです。サッカーとかラグビー、アメリカンフットボール、ベースボールとかそういうのには人がいっぱい集まりますが、宗教官事やチャペルには少しの人しか来ない。かつて宗教で始まった学校で、宗教が片すみに追いやられて、全く儀式

的なものになってしまい、みんなが熱狂してやっているのはスポーツなんです。学長も礼拝やチャペルには出ないが、スポーツだったら必ず出るんです。しかも、由々しいことに、大学のスポーツのコーチ、バスケットボールとかラグビーのコーチの給料の方が学長よりも高いのです。学問的に駄目になるとああいうことで一所懸命になるのでしょうか。聖学院はそっちの方に行かないだろうと思いますが、そういう危険性があるんです。メソジスト系大学でサーザン・メソジスト・ユニバーシティという有名な大学がテキサスにあります。あそこで問題になったのは、バスケットボールで勝とうと思って、そのために本当は成績が悪いのに高等学校から学生を入学させ、しかも特別の奨学金を出したのです。そのことが発覚して問題になった。スポーツが盛んになると、卒業生の中でも宗教のためにはお金を出さないが、スポーツのためだということと出すのがいくらでも出てくるのです。そうすると学長や理事長はそういうことには弱いから、結局貰ってしまう。

もう一つの例を挙げますと、これは深刻な問題なんです、結局今の大学というのは非常にお金がかかる。特に研究費、自然科学の研究にもすごくかかる。Big Scienceというように、ある一つの機械を買おうと思ったら何億というお金になる。そういうもののために援助を貰うわけです。アメリカの場合だったら、それは連邦政府からあるいは州政府から、あるいはロックフェラーとかカーネギーとかフォードという財団から貰う。そのときに、大体二〇世紀の初めからだんだんそういう政府や財団は、政教分離の問題もあり、はっきりと宗教色を出すところには出しにくいんです。だからノンセクターリアンにしてくれ、つまり宗派的な教派的なことは言わないでくれという。そうすると今まで、プレスビテリアン・カレッジだ、メソジストだといったのをやめて、プロテスタントとなる。さらに、プロテスタント、カトリック、これもなくしてくれと言う。となるとクリスチャンになる。今度はクリスチャンと言ってもまだ宗教臭いというので、お金を貰うために、それを全部なくしてしまう。アメリカの大学の学長の一番の仕事は

お金を集めることですから、それに従わざるを得ない。

そういうことが一つの原因でだんだん世俗化が起こってきているというのが、『The Secularization of the Academy』という本です。この本の編者の一人のマーズデンが一九九四年に『The Soul of the American University (アメリカの大学の魂)』と言う本を書きましたが、これも問題の本です。今言ったようなことを、歴史的にくわしく書いています。例えば、ハーバード、イェール、プリンストン、アーマスなどはかつてはみんなキリスト教大学だったんです。しかし、どうしてだんだんセキュラライズしてしまうのか。

私が留学した頃、今から、四五年くらい前はまだチャペルはありました。今はあっても学校と関係がなく、クリスチャンだけが集まってくる。私が行ったプリンストン大学というところには素晴らしいカテドラルのような立派なチャペルがあり、二五〇〇人入れるようになっています。しかし、その日曜日の礼拝には五〇人くらいしか来ていません。私がいたところは半分強制的でしたから、学生たちはみんな行っていました。うしろの方でサンドイッチなんか食べていたけども、でもいずれにしても皆、来ていた。ところが自由になったら来ているのは四〇人。それにクワイヤーが五〇人いるが、これはみんなペイドクワイヤーと言ってお金を貰って来ているんです。会衆のうちの二〇人は白髪の老人で名譽教授たちのご夫妻。あと一〇人がこれは皆アジア人の学生。韓国人とかミャンマーの人たちです。あと白人で来ている人が一〇人くらいいます。お父さんお母さんが大学を見に来たので一緒に来たという学生たちです。これがアメリカの大学です。ヨーロッパは昔からそうだったけれども、アメリカでさえ今そうなってきた。これがセキュラライゼーションです。それでもこの間までは卒業式では、大学の牧師がいてお祈りをしたり讚美歌を歌ったりしました。しかし今、大学紛争以来そういうのはなくなりました。

アーマスト大学というのをご存じでしょう。マサチューセッツ州にあります。これは日本にとって、非常に深い関



係があるところです。日本で最初の留学生だった新島襄と内村鑑三が学んだところです。今でも行ったら、チャペルに新島襄の油絵が正面にあります。あれは戦時中もはずさなかったと言うのですから偉いものです。今、全くチャペルはやっていません。アーマスト大学の卒業式に行っても、お祈りもなければ讃美歌もありません。だから、アーマストの人が日本に来るとびっくりします。「同志社の卒業式に行ったらまだ讃美歌を歌っている。まだお祈りをしてる」と。今、そういう状態です。これがセキュラライゼーションです。マーズデンの『アメリカの大学の魂』、これにも副題がありまして、『From Protestant Establishment to Established Non-belief』かつてプロテスタントがみんなそういう大学をつくった、それが今は無信仰を教えるところになったというのです。これが、今のアメリカの大学の問題なんです。大学に行くまでは一応、親に連れられて教会学校に行ったり、教会に行っているのです。それが、大学に行くと「宗教なんてナンセンス」と言われ、しかもこの間までは冷戦構造でまだソ連があったから、あそこに対抗するために彼らは無神論、われわれはクリスチャンだと言っていたが、それももうない。宗教なんか人間がみんなくつったもので、でっちあげだと学校で教えられる。宗教は私立大学だし、とくにキリスト教大学で教えていいはずなのに、それを教えることを先生たちも恥じらう。価値自由 (Wertfrei) というマックス・ウェーバーが主張したと、ウェーバー自身はそういうつもりで言ったとは思わないけれども、そのあやまった解釈がアメリカで広がっているのは日本と同じです。教授というのは、そういう価値問題とかいうことについて語るものではなく、全くいわゆる中立的な客観的な話だけをすればいいと思っている。ですから、何にも教えられないんです。だから、大学に行けばみんな無宗教になるのです。そこで教育を受けた者が社会を動かすのですから、日本の官僚の墮落が起ころるのは当たり前なんです。アメリカはしかしそれでもまだキリスト教があつたから今までは何とかなっていたのです。ところがこのごろアメリカもだんだんあやしくなってきた。そのことと大学教育が無関係かどうかということが非常に問題に

なっています。

ノースキャロライナにデューク大学というのがあります。南部の大学の中でも一番良い大学といわれ、最近急に伸びてきました。デュークというのは、南部でたばこ産業をやっていたメソジストの金持ちです。アメリカで禁酒、禁煙なんて一番うるさいことを言っているのはメソジストなだけども、それが片方であんと儲けていて、デューク大学に行ったら、ミスター・デュークが葉巻なんかを吸っている銅像が建っている。お金があるから、いろんなところから有名な教授を引っ張ってくるし、学生も良いのが集まり、アイビーリーグと並び称せられるくらいの良い大学になっているわけです。そのチャプレンのウィリモンと経済学の教授だったネイラーという二人がジョイント・セミナーのゼミをしました。今の学生たちがどういう学生なのか、先生たちも分からなくなりました。日本でも新人類なんて言って、本当に分からない。それで、このチャプレンと経済学の二人の先生が学生たちを集めて、何でも言いたいことを言えと行って、それをまとめた報告書が出たんです。この題が『The Abandoned Generation (見捨てられた世代)』で、副題が『Rethinking High Education』ここでもう一度高等教育を再考しようじゃないかという本が今ごろになってやっと出た。これを読んでみると面白い。最初の章の見出しが「きのうは自分が何をしたら全然覚えていない。」学生たちは毎晩、ビールやアルコールを飲んで、みんな酔っぱらうんです。これはアメリカの大学で一番の問題です。あまりにも酔っぱらって何をしたら覚えていない。デートしたんだけどそのあとは覚えていない。そのあとでいろんな問題がいっぱい起こる。セクハラからレイプとかそういう問題が起こる。そこに統計が出ているのです。今のアメリカの一人の学生が一年間に飲むビール代は一年間で買う本より高いんです。それをさらに広げていくと、アメリカの大学生が飲むビール代は、アメリカの大学図書館の図書代よりも大きい。今、そういう時代なんです。なぜそうなるのか。

これはいろいろ理由があるのですが、一つには、親から見離されている。親の半分くらいは離婚していて、自分のお父さんお母さんと一緒にいるという人は半分いないのです。みんな寂しい生活をしている。だから、大学に来るとすぐ友達と一緒にになりたい。一番いい方法は一緒に飲む。もう一つ悪いのは先生です。見捨てているのは先生なので。今の大学教授は自分がいかにして昇進するかを考えていない。そのために必要なのは業績です。だから、学生と会って学生の話聞いてるのは無駄な時間で、一所懸命論文を書く。かつてアメリカの大学というところは *teaching and research* の両方をやるんだ、ということ、ドイツとは全然違っていた。ドイツは初めから研究だけしていればいいが、アメリカではティーチングをちゃんとし、カウンセリングをしてきた。しかし今そういうことをしていたら昇進できない。ですから競ってみんな論文を書いている。それにまた研究するためのお金を貰うことに教授たちが一番関心を持っている。学生は放ったらかしで、先生からも親からも見捨てられている。だから友達だけで集まって飲んでいる。

それに、これはまた大学紛争の悪いところが出てくるのだけれども、あれ以来、日本でもそういう真似をだんだんしてきていますが、教授の評価というのが始まった。今までは先生だけが点数をつけていたが、あれ以来学生が点数をつけるわけです。そうするとどういうことになりますか。あまり宿題を出す先生は点数が悪くなる。アメリカの大学は宿題の多いのが有名で、われわれのときは一日何百ページ読むんですから大変でした。今、そんなことをやったら、CとかDとかつけられる。だから先生方はもう宿題を出さない。学生は勉強をしない。また先生が悪い点数をつける。と生徒の評価が悪く厳しくなる。そこでグレード インフレーションという問題がある。アイビリーグなんかでは、半分以上がみんなAをとっている。Bなんかつけると「あなたの教え方が悪い」とすぐ文句を言ってくる。それで今の学生は全然勉強しない。しかも、かつてわれわれがいた時は一学期に六コース、七コースとっているのは普

通でしたが、今はたった四コース、しかも宿題がない。寂しいので、もう飲むだけです。だから Abandon Generation。これを見てみると、なにかやっつアメリカの大学は日本の大学並になったと私は思うわけです。日本化しているんです。そんなことは日本では当たり前で、何も勉強しなくても卒業できるでしょう。アメリカの大学というところもだんだん日本のようにレジャーランドになってきている。ところがこの著者たちは、日本は素晴らしく上手くいつていると思っている。だから、少し日本から学んだら良いと言う。例えば、学生や職員も一緒になって学長を選ぶとか、それが良いことだとさえ書いてある。

かつて私たちのモデルであったアメリカの大学自身がこうなってきたのを見た時に、では私たちがここでやっていることは一体どういう意味を持っているのか。全く時代遅れの、クリスチャン・ユニバーシティなんてまだ言っているのか。聖学院はまだいいですよ。私のところは、インターナショナル・クリスチャン・ユニバーシティなので。アメリカでクリスチャンなんて言ったら、ファンダメンタリズムかと思っているので「今ごろクリスチャンか」と言われてしまいます。それで新年の始めにここに集まってこういうことをやるのは、とうていアメリカでは考えられない。教授会修養会なんてやっているのはせいぜい神学校だけです。大学なんていうところはそういうことをするのではなく、自分一人だけで研究をしていればいい、自分の業績を上げればいい、それが、今の大学です。そういう大学は、学生がどのようになってしまいか。それこそ、Abandon Generation。若い者が群をなして集まっているだけです。しかも今はマス・エデュケーションで、大学にみなが行くから自分も行く、そういうのが何十万何百万とどんどん増えているのです。

しかし、そういうアメリカも、そこがアメリカのいいところというか、希望があると思うのですが、あるところまで行くと再生力というか、戻る力がある。だからさっき触れた本でもそうだけでも、『The Soul of the American

University』のように、かつてのわれわれの魂はどこに行ったのかと、戻るところがあるわけです。そこで、やっと数年以来、本来大学というのはなんだっただろう、大学教育ってなんなのだろうと、反省を始めました。かつてキリスト教会が母体となったのはどういう意味があるのだろうか、というので、もう一回クリスチャン・カレッジ、クリスチャン・ユニバーシティを見直そうという動きが出てきています。

私自身の関係したところでは、去年の夏ですけれども、ブラジルのリオデジャネイロで、世界メソジスト教会の大会が開かれましたが、同時に世界のメソジスト大学のアンシエーションができたのです。そこで、発会式が行われまして、そのテーマが「Education for World Citizenship」というので、二人のキーノートスピーカーが選ばれました。一人がイェール大学のイギリス人の経済史家ポール・ケネディ、日本でも翻訳されて有名な『The Rise and Fall of the Great Powers (大国の興亡)』を書いたそれこそグローバルに考える人で、実に博学な人です。それから私も講演しました。先程の「先なるものはあとに、あとなるものは先に」に言及しながら、あなたたちは進んでいるからそうなるのか、それともわれわれが遅れているからそうなるのかと問題提起したら、数年の間に状況や雰囲気が変わっていて、みんな非常に真剣に聞いてくれました。ポール・ケネディは地球規模的に物事を考えている人で、彼の有名な言葉に、*“Think globally and act locally”* 地球規模的に考えなさい、しかし、それぞれの地域において行動しなさいというのがあります。けれどもそういう人を生み出すのはどこか。マス大学になって、二万、三万、四万、五万人の学生という大きな大学ではたして教育ができるのか。それとも今までの本来のキリスト教大学がそうであったように、少人数のスモール リベラル アーツ カレッジ、そういうところでしかできないのではないかと私はチャレンジした。今までカレッジだったのが、ユニバーシティになるとセキュライズする。これは経営の問題もあるけどもやはり深刻に考えなければならぬ問題です。

日本のキリスト教大学が世俗化したのは、経営が一つの理由ですね。学生が多くなれば収入も増える。そこで経営の論理に教育の論理が負け、実力以上に学校が拡大した。それで困っているのです。たった1%のクリスチャンしかないんですよ。それなのに日本の大学の10%の学生をキリスト教大学が収容しているんです。そこで、はたしてキリスト教教育ができるでしょうか。私は教育には適正サイズがあると思うんだけど、身分不相応に大きくなってしまい、それで今、困っているんです。アメリカの大学でも同じではないかと、私はチャレンジしたわけです。あなたたちは日本は遅れていると思うかもしれないが、日本のキリスト教大学というのは一所懸命に日本でこそキリスト教大学が必要なんだと感ずると、チャレンジしたんです。今ヨーロッパやアメリカというのは、ポストクリスチャンの国々になっています。キリスト教以前の、日本のようなブレクリスチャンの文化とか社会というのは非常に問題があるけれども、ポストクリスチャンの文化や社会というのはタチが悪い。クリスチャンに一度なって、それから駄目になったクリスチャンというのはどうしようもない。今のヨーロッパやアメリカはそういうところなんです。だから、今の世界は東西を問わず、南北を問わずみんな共通にミッション フィールドなんです。そこで互いにいろいろな情報を交換しながらあるいは協力しながら、狭くなった世界の地球のためにもどのような教育をなすべきかを、特にクリスチャンたちは責任があるし、考えるべきでないかとチャレンジしたんです。

さらに私が言ったことは、いわゆる発展途上国と言われているアジア諸国のことです。

これらの国々は、「ルック・イースト」、日本を見習えと言います。近代化に日本が一番成功したのは教育熱心だったから、とみんな教育に興味がある。大学に行こうと、アジアの諸国はあんな貧しい国なのに無理して大学に行く。大変です。大学に行かなければ仕事がないんです。だからすごい教育熱です。台湾でも韓国でもそうです。東南アジアの諸国もそうです。しかし、私はここに一つの大きな落とし穴があると思っています。このことを二年前に

りますけれども、CCA（アジアキリスト教協議会）とWSCF（世界学生キリスト者連盟）という二つの組織がありますが、そのジョイントのステートメントの中で、学生も含めてこう言っているんです。今日の高等教育の新しい原理は、採算性だ。学生は何のために大学に行くのか。経済的に得だから。大学の方もどうして大学を経営するかというと、経済的に採算がとれるような教育をする。そこでは具体的にはお金になる、富を生産する教育と科目、特に科学とか技術とか経済学等によってその目的が達成される。すなわち利益追求です。それが高等教育全部を支配して、大学に行くというものは何も人格教育を受けるとか、人間教育を受けるとか、みんな金儲けのためなんです。少しでもサラリーが良くなる。そうすることによって国が良くなる。それが原理になっていると

いる。

しかも、その危険性はアメリカの場合もそうだったように、容易に軍事産業と結びつくのです。ミリタリーインダストリーコンプレックス。これは、アイゼンハワーの有名な言葉ですが、軍人にして初めて言えた言葉かもしれないけど、彼が非常に心配したのは、将来のアメリカが軍事産業中心になって行き、それに大学が結びつくのではないかとということでした。アメリカでも急に大学が増えていったのは、国防省がソ連に勝つために、宇宙研究だとかミサイルの研究のためだったらいくらでもお金を出した。それを貰うために大学は宗教色を失ってもやろうとした。ですから、このCCAとWSCFのジョイントステートメントは、今や世界的な大学教育の商業化、あるいは、大学の産業化、それに対して憂いを述べています。そこには本来の人間教育というのは全然ない。教育というのは一体何なのかというビジョンがない。これに対してクリスチャンは、大学についてのそれとは違う、ほかのもっと大きなビジョンを宣言すべきだ。特に、人間の救い、救済ということをキリスト教は言っているのだから、救済のキリスト教的な理解にとっての中心的な、それこそ総合的な、全人間的な救い、そして社会、地球の問題を含む全人間的な観点

からのビジョンを打ち出すべきだ。大学にいるクリスチャンは、自分のための得だとか善ではなく、他者のための善、それに関心を持った人々を造り出す教育のために努力すべきではないだろうか。要するに地上における神の支配、「神の国」のしるしであるところの正義、平和、愛、自由、そういったことに身を捧げようとする若者たちを造る教育をしなければ、今日の大学の使命と責任を果たすことにはならない。このようにアジアの学生キリスト者たちは言っているのです。

以上述べてきたような、こういう世界的な状況を見て、私は現代の大学というのは世界的に東西南北問わず、その目標としているところ、あるいは原理としているところ、あるいは実際の経営をしているところを見ても、結局これは富、マモンに仕えている。そのための大学になってしまったと思います。かつてマハトマ・ガンジーが一九一〇年代、第一次世界大戦後のヨーロッパを見て、こういうことを既に言いました。「今日の、ヨーロッパは名前だけのクリスチャンだ。実際にヨーロッパが拝んでいるのは神ではなくてマモンだ」と。しかし、現在これはヨーロッパだけではありません。アメリカも日本も世界中がそうです。世界中が神じゃなくて富を、マモンを拝んでいる。しかし、イエスは言ったんです。「神と富とに兼ね仕えることはできない」。難しいのではないんですよ、できないと言っているんです。ここで思い起こすのはマックス・ウェバーが『プロテスタントの倫理と資本主義精神』の最後のところで引用しているメソジストの創立者だったジョン・ウェスレーの有名なアドバイスです。これは、実はウェスレーがメソジストに対する忠告としてした説教「Use of Money (ごのようにお金を使うか)」、その説教の一部です。クリスチャンたちは仕事に熱心で贅沢もしないから、どんどん金持ちになる。ところが、人間は金を持つと墮落する。金があると必ず宗教心が減ってくる。それを見てウェスレーはどうしたらいいかという問題にぶつかっただけです。そのときに彼が与えたアドバイスが、これはウェバーが引用してしているところなんです。「Give all you can, save all you can」で



きるだけ儲けなさい。できるだけ貯めなさい。そして“and give all you can”でできるだけ与えなさい。

この間、私は財界人のあるグループに呼ばれたときに日本の資本主義はこの三つのうちの二つしかやってない。儲けることと貯めることだけ。どれだけ出していますか。ウェスレーが言っているのは、それだけではなく、できるだけ与えなさい。しかし、これはお金のことだけではない。もちろんこのことも教えなくてはいけないんだけど、今日の大学はその金儲けのために一所懸命知識や技能を身につけさせようとしているわけです。私はそれらをできるだけ身につけたら良い、知識や技能をできるだけ獲得したらよいと思う。しかし、それらをできるだけ人に与えなさいということ強調したい。そういう教育ができるのはキリスト教大学じゃないかと思っっているわけです。こういう人間を教育するところに今日の世界におけるキリスト教大学の意義があるんじゃないだろうかと思っっているのです。そういう意味で聖学院あるいはICUとか日本におけるキリスト教大学の意義があるんじゃないだろうかと思っっているのですけれども、このことは日本だけじゃない。一二年前に私が言ったように日本だけにおける意義じゃない。世界的な意義を持っっている。世界の人が注目している。こういうところでキリスト教大学、キリスト教学校とはどういう教育をするところなのか。私は、今のこういう全世界的な商業化に向かってる大学というものを変革する可能性を持っっているのはキリスト教大学しかないんじゃないかと思っっています。

最後に一つの具体的な例を申し上げますが、雑誌を持ってきましたが『ウースター』という題ですがこれは実はカレッジ・オブ・ウースターというオハイオのクリーブランドの近くにあるウースター大学の雑誌です。ちょうど、去年ウースターの一〇代目の学長として新しい学長が任命された。この人はスタントン・ヘールズ、この人が学長になったときの就任式の特集号なんです。この大学はプレスピテリアン、長老派のカレッジとして、今から約一三〇年前にできたものです。今でも学生数が一七〇〇人、大体聖学院と同じくらいです。しかしそういうのが今アメリカに

一六〇ぐらいあるんです。これは日本では知られていないけど、アメリカでは良い教育をしているところはみんなスモール リベラル アーツ カレッジなんです。ハーバードやイエール、プリンストンも元はみんなこうだった。それがだんだん一九世紀になってユニバーシティになり、今やマルティバーシティになってしまった。そうやってくると本来の良い教育がなくなってしまった。リベラル アーツ カレッジはみんなスモール サイズなんです。一〇人の学生に対して先生が一人。それでこそ本当にパーソナル・エデュケーションができる。ですからかつては大学を出たということは教育を受けたということでした。ですから倫理的にも優れた人たちが出てきた。でも今はそうじゃない。大学を出たという人は決して倫理的にいい人ではない。ところが、かつてのリベラル アーツ カレッジは「何のための知識、何のための技術なのか。」そういうことをはっきり教えた。そういう教育をしていた。だからウースターの使命はますます重大だと新学長は言っているのです。今や「金のための知識」「金のための技術」しか教えない。この大学の四人の卒業生が現在カレッジやユニバーシティの大学の学長になっています。この大学の卒業生の中で有名ながアーサー・コンプトンという物理学者でノーベル賞を貰った人です。コンプトン兄弟のお父さんがこの学校の理事でしたが、その子供たちが三人とも、有名な学者や大学の学長になっています。そういう人を生み出す、これがスモール カレッジの伝統なんです。そこで本当に生きた教育がなされていれば、卒業生の中から学者や教育者が出てくるはずですよ。

この学長就任式のときにアメリカの学界を代表してお祝いの演説をしたのがエドワード・ウィルソンという、ハーバード大学で四〇年間、生物学を教えていた教授なんです。この人がなかなか面白い話をしている。「知識の本質的な統一」について話をしている。この人はタイムマガジンが去年の六月に今のアメリカの代表的な、アメリカでもっとも影響力のある人二五人を選んだ中に選ばれた人です。自然科学の代表的な人です。そういう立場から、今の大学の

問題を取り上げているのですが、現代の大学はバラバラになっている。大学内で、全然言葉が通じない。同じ専門の仲間だけでしか通じない言葉でしゃべっている。

しかしハーバード大学はさすがですね。そこでこの人は自然科学専攻でない学生たち、フレッシュマンに生物学概論を教えた。なぜか。今のアメリカや世界の問題は、行政者だとか指導者たちがほとんど科学についてまるで何も知らないことだ。大学の一年生、フレッシュマン程度の科学の知識を持っている人はおそらく5%しかない。九五%の人は科学について全く無知だ。だから、私は自然科学を専攻していない学生たち、この学生たちのだれかが将来、大統領になるかも知れない。将来の首相になるかも知れないと思って一所懸命教えてきたと言うんです。しかしはつきり言うところでは難しい。あまりに専門化し断片化しているから。

しかし、今の世界的な問題はいろんな学問がバラバラになっていては解決できない。環境問題一つにしたって、環境問題を解決するためには自然科学の知識も必要ですし、社会政策も必要であるし、倫理も必要になる。こういう三つのものをインテグレートしないとできない。それが可能なのはウースターのようなリベラル アーツ カレッジであると云っている。そしてウースターのような小さな大学にこそアメリカの大学の将来はあろうと結んでいる。私はこういうものを見てみるとアメリカの大学は大きな問題を抱えているが、それを何とか乗り越えようと努力しているし、「先なるものはあとに、あとなるものは先に」と言うイエスの言葉を思い出しながら、われわれが今やっていることは決して古くさいことではない。むしろ世界に先駆けてやっているという世界的な意義を持っているんじゃないかと痛感しておりますので、そのことを皆さんにお伝えしようと思ったわけです。

(国際基督教大学教授・同大学教会牧師)